



## 説教要旨「孤独な祈り」

マルコによる福音書 14章 32～42節

弟子たちと共に最後の晩餐を食したイエス様は、その日のうちにエルサレムの東、オリーブ山のゲッセマネと呼ばれる庭園に行かれました。この後すぐ、剣や棒をもった群衆がやってきてイエス様は捕らえられることとなります。そんな切羽詰まった場面で、「ひどく恐れてもだえ始め」、そして「地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみのときが過ぎ去るようにと」祈るイエス様の姿がここには描かれています。その一方で、イエス様に付き従っていた弟子たちは居眠りをしていました。

弟子たちが、目を覚ましていられなかったということは、イエス様が向かい合っている苦しみがどのようなものかが分からなかったということです。イエス様の苦しみに共感することが出来なかったのです。弟子たちにとってイエス様の苦しみは、意味の分からない、全くの他人事でした。だから真剣に祈るイエス様を横目に眠りこけていられたのです。

十字架の死を目前にし、十字架の痛みを取りのけてほしいともだえ苦しむイエス様の姿を、わたしたちはともすると、救い主らしからぬ姿であると思ってしまうかもしれません。事実、キリスト教が広まっていく中で、この祈りの姿を取り上げて、イエス様のこの狼狽ぶりが「情けない」などと揶揄されたことがあったようです。しかし、このような姿こそが、神様の前で祈る人の真摯な姿なのではないでしょうか。神様に祈るときにどうしてかっこつけて、すました顔で祈ることが出来るでしょうか。そのような祈りが本当に祈りだといえるのでしょうか。自分の力でどうにもならないから、なりふり構わずに神様に助けを求めるのです。どうして、このイエス様の姿を、みっともないなどと笑えるでしょうか。しかもその痛みは、わたしたちの身代わりとして引き受けられた痛みなのです。

イエス様が、わたしたちの罪のために身もだえしながら祈っておられるのに、もかかわらず、その痛みがまるで他人事であるかのように眠りこけ、祈りを合わせることが出来ない弟子たちの姿は、わたしたち自身の姿そのものではないでしょうか。

(2022・4・10 説教者：稲垣真実)